

若者支援のアレンジレシピ

実例から掘り下げる、若者との活動の課題とヒント

SPICE01_参画のはしごから

居場所と参画の微妙な関係

#「参画のはしご」

#ロジャー・ハート

SPICE02_成長を可視化するふりかえり

次の活動に向かう仕掛けとしての「評価」

#「ボランティア活動報告書」

#ループリック評価

#CUDBAS手法

SPICE03_コーディネーターのためのQ&A

お悩み相談と編集委員の視点

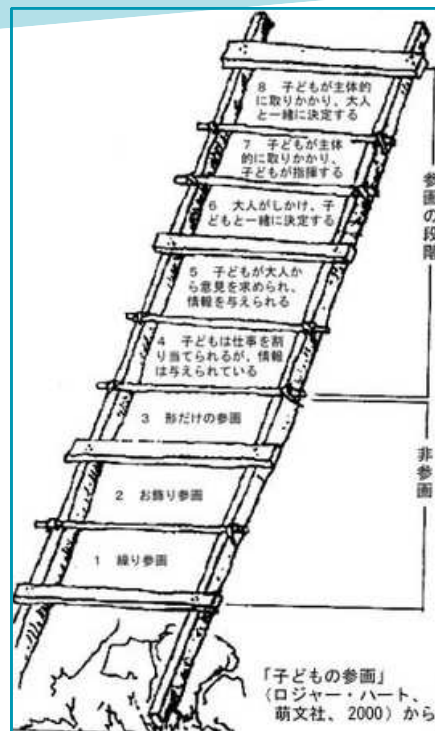
#「関わり方」の加減

#「目標」の持ち方

#「連絡方法」のツール

若者の居場所や、地域での活動を考えるとき、「参画のはしご」という言葉がよく語られます。「参加」は既にある場所やプログラムに加わることで、「参画」は計画の段階から加わったり、責任を分かち合う形で参加したりすることと理解されています。

何度も聞いてきた言葉だからこそ、自らの現場や色々な場面、ニュースやまちの若者を思い浮かべながら、改めて考えてみましょう。若者や地域、事業の見え方が、明日から少しだけ変わってくるかもしれません。



■ 「こどもまんなか」の芽生え

近年、子ども・若者の社会への参加、参画に注目が集まっており、大小を問わず多くの事例が報告されています。学校では「総合的な探究の時間」などを捉えプロジェクト型の学習に取り組んでおり、多くの地域でも「子ども参加のまちづくり」を進めています。行政としても、こども基本法に定められた「子どもの意見を行政に反映」させることを目的とし、「子ども目線会議」を実施するなど、意見を反映する仕組みを整えつつあります。

この背景には、1989年に国連で採択された子どもの権利条約の中で、比較的光の当たらなかった「参加の権利」への認識が徐々に浸透してきたことがあります。ロジャー・ハートによる「子ども参画論」は、この「参加の権利」を体系的に論じたものであり、若者を含む「子ども参画」を社会の意思決定に影響を与える過程として定義しました。子どもは自らの人生の自己決定に関与することはもちろん、地域社会や家庭、学校、さらには社会全体にまでその関与の範囲が広がるべきだとし、子どもの自発性や主体性の重要性を強調しています。その文脈で、ハートは、有名な「参画のはしご」(The Ladder of Participation)のモデルを提唱し、子どもの参画の形態を8つに分類し、その上がるにつれて子どもの主体的な関与が大きくなると説明しました。ここではハートの言う「子ども」を若者を含むものと確認した上で、以下みていきます。

■ 階層への基本的な理解

参画のはしごについては一般的に、子どもが計画から実行、評価に至るまでの全ての過程に参加することが望ましいとされていますが、初めからそこに到達する子どもはいないと言ってよいでしょう。その実現には大人が子どもたちの目標設定を支援し、彼らが自分のペースで成長できる環境を整える必要があります。近くの大人は日常生活を支援するユースワーカー、地域活動のコーディネーター、あるいは異なる主体の交流を促すファシリテーターの役割を担い、支援者として子どもの考えを尊重し、主役である彼らの意見に耳を傾け、子どもの力を引き出します。

参画の度合いが低い階層の段階は、大人によって与えられた仕事を果たしながら情報を受け取る状態で、形式的な参加に留まる「お飾り参画」、さらに大人の意向が強いものは「操り参画」と称されます。次の段階では子ども自身が意見を言え、さらに次には大人と共に決定する過程が含まれます。7段階目では子どもが主体的に行動し、指揮する形が理想とされ、8段階目になると子どもが自分たちの活動を考え、大人を巻き込むことになっていきます。事例として多く挙がる地域の伝統行事やボランティアなどは、役割を持ちながら納得して参加する、4段階目の状態が多いと言えます。

本稿ではここまで、参画のはしごの低い階層に位置する若者が、大人と日常を過ごし、地域で活動に参加し、高い階層に上っていく事例を取り上げてきました。

■ 参画のはしごモデルの課題

参画のはしごの捉え方については課題もあります。そもそもハートは、子どもたちの組織化と代表性の確保を通じて「民主主義の実現」を目指しますが、これは裏を返すと低い階層にいる子どもや地域活動が評価されない風潮を呼びことにつながります。日常の中に安心していられる場所、居るだけでよい場所を求めている子どもたちは、何かをがんばりたいわけではありません。そういった子どもも存在することを社会が認識し、居場所を確保する視点を失ってはなりません。遊び場やユースセンターなどの身近な居場所がこれにあたります。

また、参画の好事例として挙げられることの多い子どもによる議会などは、非日常的な場に少数の若者が選抜されて参加するというケースです。選抜される子どもは各学校の生徒会長、ということも少なくなく、全ての子どもに機会を提供することが難しいという意味では、参画する一部の層を固定化する働きもあるということは押さえておく必要があります。

参加・参画の段階の高低だけを問うのではなく、日常と非日常の両輪に、それぞれの子どもの状況に合う様々な居場所がある状態が理想と言えそうです。

また、子どもの参加は本来自発的なものですが、大人が子どもを参画させる構造が多くみられます。様々な施設や事業の事情がある中で、ここから完全に脱却することは困難かもしれませんが、大人はせめてそのことに自覚的でありたいものです。特に社会や地域のために参画させる、という考え方に陥ると、結局は子どもの視点を離れ、大人が子どもを利用し、「共生社会」を謳いながら関係性に優劣を持ち込むこととなります。さらに、「参画能力を育成してあげる」という発想自体も、子どもを大人に従属させる側面を持ち、注意が必要です。子どもに寄り添うコーディネーターの存在が、こういった構造を緩和する一つの鍵になります。

■ 地域：コミュニティからの視点

子どもの参画の効果としては、子ども個人としての成長がありますが、コミュニティの側にも変化が生じます。例えば、2011年の東日本大震災の際、子ども会の活動が盛んな地域では避難所の開設や運営がスムーズに進んだ、という言説があります。子ども会で行うキャンプ事業などの体験が災害対応の際に活用できたのかもしれませんが、ジュニア・リーダーやユース・リーダーなどの若者が運営側に入りやすい人間関係があったということも示唆されています。ハートの目指す、民主主義の実現や社会を変革するというマクロ的な発想はありつつも、生活する場の生きやすさに直結する、地域に与えるミクロの影響こそ、結果的として重要な効果になっているのかもしれませんが。

子どもの社会参画の場を、大人が知識や技術を提供（：教育）する場として構築することは容易です。しかし、場をコーディネートする大人は、参画のはしごを上らせようとするのではなく、意識しつつも結果として上っているとい、くらいに捉えておいた方がよい場面もあるのではないのでしょうか。やや極端に言えば、はしごは上らなければならないものではなく、子どもが上りたいかどうか、という主体性の方が重要です。

多くの場合、子ども、特に若者の前向きな変化には、若いコーディネーターや年下の参加者の存在が重要らしいことが見えてきています（本稿CASE_02、03、04、07）。また、コーディネーターが若者と地域それぞれと事前に関わり方を調整し、無理なく出会えるようにしておく準備も重要な要素です（本稿CASE05、06）。若者の立場に立つと、日常的な生活の中に異年齢との関係が生まれ、地域との関係性が深化していく、無理のない営みにこそ「参画のはしご」の持続可能性があります。

（事務局職員 長南 悠太）

<参考文献>

- ロジャー・ハート（2000）『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社
神奈川県立青少年センター「体験学習、子ども・若者の参画、子どもの権利条約について（育成指針の参考資料-3）」
<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/ikusei/kyougikai/sankou3.html>（2025.3.15 アクセス）
- 山下 智也（2009）「子ども参加論の課題と展望：ロジャー・ハートの「子ども参画」論を乗り越える」
九州大学学術情報リポジトリ https://api.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/18422/p101.pdf（2025.3.15 アクセス）
- 五十嵐 牧子（2001）「生涯学習社会における「子どもの参画」についての一考察」
文教大学付属教育研究所紀要第10号
- 川崎市子どもの権利フォーラム編（2024）『今だから明かす条例制定秘話』第2版 エイデル研究所
- 藤原文雄・生重幸恵・竹原和泉・谷口史子・森万喜子・四柳千夏子（2021）
『学校と社会をつなぐ！これからの人づくり・学校づくり・地域づくり』学事出版

若者との活動では、ふりかえりを行う場面が多く出てきます。

ただ、このふりかえりというのが実に厄介。家庭や学校での「評価」を逃れてきた若者たちがいる一方、入学試験、就職活動での活用を目的とし、「高評価」のみを求めている若者もいます。さらに、そこに学びとして定着することを期待する大人の姿もある…という中で、どのようなふりかえりが適しているのかはそれぞれの現場次第、地域やコーディネーターの腕の見せどころなのかもしれません。

ただ、若者の居場所となる施設側や事業を実施する立場としては、若者を評価するというよりも事業を評価するという意味での「ふりかえり」の必要性もあります。事業をよりよくするためには利用人数や参加人数といった量的評価、心の動きといった質的評価の双方の観点が必要ですが、特に後者を数値化することは難しい部分があります。

教育心理学的な観点に立てば、不登校やいじめの防止、対人関係能力の育成に使用される「hyper-QU」（河村、2006）のようなアンケート調査の導入が効果的だと考えられますが、これは生活支援に寄った施設に限られ、その他の全ての現場や活動で応用できる方法とはなりません。

質的な評価を、どのように実施するか。さらにそれを、事業実施者だけではなく若者自身の心に働き掛けるふりかえりにするにはどういった方法があるか。大切なことは、若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組みです。ここでは、地域活動を「ボランティア活動」という見方に改め、若者自身のふりかえりについて、3つの方法を取り上げます。

■ ボランタリーな活動を評価すること

比較的多くの現場で取り入れやすい取組みに、任意の書式を作成して活動に応じて蓄積していく方法があります。この場合、若者本人がふりかえりとして後日見られる、活用できる様式であることが求められます。大学入試の総合型選抜や学校推薦型選抜(注：旧AO選抜)では、各校が様々な様式への記載を求めますが、こういった形に近いものです。

ボランティア活動、あるいはボランタリーな活動は、自らのやりたいという内発的な動機から取り組むことが理想ではあります。

ただ、現実に入試試験、就職活動での活用を目的としている参加者もいる以上、書式はそういった需要にも耐えうるものである方がよりよいと若者は考えています。またそれらを目的としていない参加者であったとしても、いつか忘れてしまうのはもったいないことでもあります。

つまり若者の立場に立てば、「任意の書式」を求める条件は、

- ①例えば各校の入試試験に係る別様式に転用が可能なレベルで詳細であり、
- ②一方で作成・記入の負担感が低く、
- ③後日活動の履歴をポートフォリオとして活用できる、この3点だと言えます。

さらに、「若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組み」として、私たちとしては加点法、あるいは絶対評価としてふりかえる方法であるということにもこだわりたい点です。

こういった方法を取り、私たちも活用可能な形で書式を公開する団体があります。「ボランティア活動報告書・総括ボランティア活動報告書」を作成した公益財団法人さわやか福祉財団です。

■ 「ボランティア活動報告書」 「総括ボランティア活動報告書」

(公財) さわやか福祉財団は、高校生や大学生に対し、

「一人ひとりが主体的に自らの強みとなる特性を育て、自身の充実感に満ちた人生を送ってほしいと願っています。そのためには、目的をもって地域等のボランティア活動に積極的に参加し、社会課題を理解し、関係者とも協働してその解決のために努力する体験をする中で、社会に有用な自己の特性を確認し、それを伸ばしていくことが大切」であると伝えます。

これはボランティアへの参加を通じ、社会課題の理解、他者との協働、自己の特性(強み)の理解を促すというものです。これは、参画のはしごにおける4段階目以降のまちにおける若者の活動と非常に相性がよいものです。

この様式が整えられた背景を、報告書では「これからの社会に求められる力とは」という部分で次のように言及しています。

「2018年度に一般社団法人日本経済団体連合会(筆者注：経団連)が示した「高等教育(筆者注：大学、専門学校等)に関するアンケート結果」から、企業は学生に「自らの問題意識に基づき課題を設定し、主体的に解を作り出す能力」を求めていることが分かりました。具体的には「主体性」、「実行力」、「課題設定・解決能力」、「チームワーク・協調性」、「リーダーシップ」の5つの特性に分類し、この特性を効果的に育む場としてボランティア活動を推奨しています。」

文部科学省や中央教育審議会の資料に依拠して分類された特性、「情動的・意欲的な面の特性」である①自発性・主体性と②実行力・責任感、「対人関係的・社会関係的な面の特性」である ③チーム

ワーク・協調性、④リーダーシップ、「認知的・課題解決的な面の特性」である⑤課題解決・創造力という分類は、ボランティアで想定される様々な活動においてバランスがとれており、さらに自由記述欄が設けられていることからカスタマイズも可能になっています。

入学試験や就職対策としては非常に質の高い様式であると言えます。

神奈川県立青少年センターでは、CASE_07のユースサポーターについて、2024年度この様式を参考にし、活動のふりかえりを実施しています。彼らは基本的には入学試験や就職活動での活用の予定はありませんが、地域の声がフィードバックされることを好意的に捉えているようです。2025年3月現在、効果検証は途上ではありますが、一定の効果を見込んでいます。

ボランティア活動報告書の手引き・ 総括ボランティア活動報告書等の 案内



高校生・大学生用の手引きの他に、活動関係者用、高校・大学進学・就職担当用があります。また総括ボランティア活動報告書の見方についても大学入学者選抜担当用、企業採用担当用があるのでそれぞれ確認することをお勧めします。なお、記入用の下のシートはExcelでも配布しています。



ボランティア活動報告書の手引き（高校生・大学生用）

なお、神奈川県立青少年センターでは、現在総括ボランティア活動報告書の作成には至っていません。今後どういった活用が考えられるか、ボランティア：事業参加者とともに考えていく予定です。

この様式は、参画の階層が高い若者に特に効果的ですが、低い階層であっても、丁寧にこういったふりかえりを行うことで参加・参画のステージが内発的に引き上がっていく効果もあるとみています。

様式の細かな活用方法はリンク先へ譲りますが、ここでは実際に作成したイメージを抜粋して紹介します。次の活動への前向きな姿勢を持つことができる「評価」を、ぜひ一度検討されることをお勧めしたいと思っています。

ボランティア活動報告書・総括ボランティア活動報告書の活用イメージ①			
※ボランティア活動関係者 本人と直接関わったボランティア活動の参加者またはボランティア活動を支援して参画する人			
高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限
高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限	高校生・大学生用 1. ボランティア活動報告書の書き方 2. ボランティア活動報告書の記入方法 3. ボランティア活動報告書の提出方法 4. ボランティア活動報告書の提出期限

ボランティア活動報告書【記入要領】	
氏名	活動期間
活動内容	活動の動機・目的
活動から得たもの	活動で育った特性
活動に対するコメント	活動関係者記入欄

総括ボランティア活動報告書【記入要領】	
累計活動報告書数	累計活動報告書期間
多い活動分野	特性
活動関係者がマークした特性	本人のコメント
活動で成長したと思う特性など	活動関係者の主なコメント

- (上) 活用のイメージ
- (左) 記入例
- (下) 今年度、実際に青少年センターで使用している形式（CASE_07「ステップアップキャラバン」より）

ボランティア活動報告書	
氏名	活動期間
活動内容	活動の動機・目的
活動から得たもの	活動で育った特性
活動に対するコメント	活動関係者記入欄

■ ルーブリック評価

より個々の若者の現在地を丁寧に分析し、ふりかえりを詳細に行う方法として、「ルーブリック評価」があります。ルーブリックとは、評価基準を整理し、段階ごとに達成度を示した評価表のことです。

具体的には、ボランティア活動に先立ち、縦軸に「評価レベル（例：優れている、十分、改善が必要）」、横軸に「評価項目（例：情報収集、分析力、発表の明確さ）」を設定し、交差するセルに具体的な判断の基準を文章で記述するというものです。

そして活動後のふりかえりでは、この表を元に自己評価を行います。これにより、「何をどのように達成すれば良いか」が明確な活動になり、活動中の指針となります。

近年、学校教育の現場では、探究学習等でも既にこの方法を取り入れている地域もあるので若者の方がもしかすると実施方法に詳しいかもしれません。ただし、学校では各回の授業ごとに作成し、しかも授業を受ける生徒全員が同じルーブリックに対して取り組むのが基本ですが、ボランティアについては成績評価を行うものではないので同じようにする必要はありません。

毎回作成せずに事業ごとに作成する、コーディネーターとともに各参加者がそれぞれ考える…、というような、緩い進め方の方がむしろ効果を挙げられるように感じます。

作成方法は、

- ①活動で伸ばしたい資質・能力を明確にする、
- ②評価項目を3～4つ設定する、
- ③評価基準を文章化する、
- ④判断基準を3～4段階で設定する、
- ⑤評価表を完成させ、配点を決定する、

です。このとき、学校の成績評価では例えばC評価など改善が必要とする基準に関して、「～できなかった」といった書き方をすることもあります。

地域でのボランティアな活動では、そういったネガティブな書き方を乗り越え、できたこと、取り組んだことに焦点を当て文章化の方が、より安心して取り組むことができます。コーディネーターが丁寧に関わり、若者が、自らのやりたいこと、伸ばしたい力をともに考えて計画・実施することで、主体的な活動や前向きなふりかえりにつないでいくことが期待できます。

実施後は、本人がマス目に丸を付けたり、コーディネーターや地域の方がスタンプを押したりするといった活用が考えられます。基本的に点数化は必要ないと思われそうですが、数値として事業実施者側の評価に転用する場合、匿名化するなどプライバシーに配慮しましょう。

リンク先にわかりやすい解説が載っていますので、ぜひご一読ください。コーディネーターと若者がともに取り組むという意味でも意義のある評価方法なので、チャレンジする価値があると思います。



ルーブリック作成のイメージ（CASE_07「ステップアップキャラバン」より）

〈ルーブリック表例①：企画段階など〉

評価観点	A(優れている)	B(十分である)	C(改善が必要)
役割分担と協力	全員が積極的に役割を担い、協力し合っている	大部分のメンバーが協力できている	一部のメンバーに作業が偏っている
対話の進め方	積極的な発言があり、建設的な議論ができていく	話し合いが進むが、意見が限られる	意見が一方的で、対話が少ない
成果物の質	情報が整理され、完成度の高い提案が作成できた	大枠は整理されているが一部不足	情報整理や内容が不足している

〈ルーブリック表例②：発表段階など〉

評価観点	A(優れている)	B(十分である)	C(改善が必要)
発表内容の構成	情報が論理的に整理され、主張が分かりやすい	情報は整理されているが、細部に不足がある	情報整理が不十分で、伝わりにくい
スライドや資料の工夫	図表や写真を適切に使い、視覚的に分かりやすい	図表や写真を使用しているが一部冗長	文字が多すぎたり視覚要素が欠けている
発表態度	声の大きさや話し方が聞き取りやすく、落ち着いた	声は聞こえるが、一部説明が早口	小さな声や早口で、聞き取りにくい
質疑対応	質問に対し、冷静に対応し、分かりやすく説明できた	質問には答えたが、やや説明が不足している	質問に対し、答えられなかった

CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」
『ルーブリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説』より



[CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」
『ルーブリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説』](#)



[リクルート進学総研「探究活動におけるルーブリック 小瀬高校 令和5年度版」](#)

■ CUDBAS（クドバス）手法

本来ボランティア活動というものは、自己と他者の関わりの中での偶然の出来事にも結果や充実感が左右されます。若者にとっては、自身がどの程度活動に参加・参画できたのか、活動を通じてどの程度の自己の深化があったか、などを客観的に評価することは非常に難しいものです。

ボランティアの質的評価について、「一定の評価軸は存在せず、評価を行う主体者の問題意識、テーマや目的、課題等に基づき進めるもの」という立場に立つ神奈川大学の齊藤ゆか教授は、「自己評価」と「学習プロセス」の質的な評価を可能にする「CUDBAS」手法を実践しています。

これは、「A Method of Curriculum Development Based on Vocational Ability Structure」の略称で、「職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法」という意味で、ルーブリック評価をさらに詳細に、丁寧に実施するイメージです。

手法を開発した森和夫（1989）は、

- ①作業が短く、結果が早く出ること
 - ②手続きがシンプルで簡単であること
 - ③小集団により意思決定を行うため、妥当性が高くなること
 - ④作成者が第一人者であれば説得力があること
 - ⑤すべてのプロセスの記録が残ること
 - ⑥応用範囲が広いこと
- の6点を特徴として挙げており、この⑥の特徴を生かしボランティア活動で展開した事例が報告されています。

「ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性」（齊藤、2007）で紹介される事例では、全15回の講義の終盤3回のふりかえりの中で、CUDBASが右上の図の流れで実施されています。「7 メンバーで仕事カードの配列（重要度の序列）と技術・技能マップを作成」、「8 技能・技術のチェックリストの作成」を通して作成されたものが下の表です。

このボランティアの「必要能力・資質リスト」（：チャート）は、学生がカードに書き出し、整理した情報を手直したものです。似た内容のカードをまとめてボランティア活動に必要な資質・能力としてタイトルを付ける、という方法をとっています。

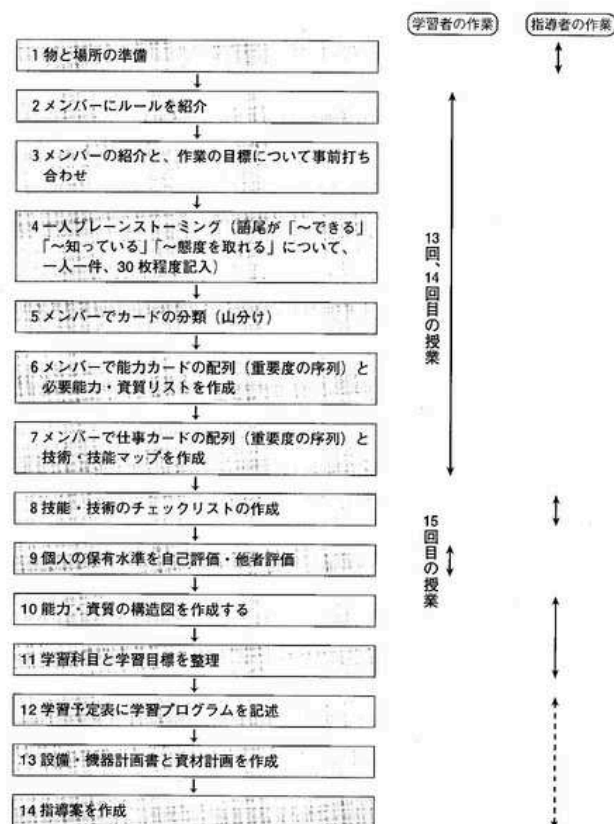
CUDBASによるチャート：「ボランティア活動に必要な資質・能力」

齊藤（2007）作成資料より抜粋

	必要能力	能力1	能力2	能力3	能力4	能力5	能力6	能力7	能力8	能力9	能力10
1	他者受容能力	1-1 相手の気持ちを理解することができる	1-2 周りに気を使うことができる	1-3 人をいたわることができる	1-4 人の立場に立って考えられる能力をもっている	1-5 多様な考え方も受け入れられる能力をもっている	1-6 周りに協調する能力をもっている	1-7 協調性を身に付けることができる	1-8 違う立場から物事を見られる	1-9 周りの人の様子をよくみる能力をもっている	1-10 人間観察ができる
2	感謝表明能力／信頼関係構築の能力／時間管理能力	2-1 来てくれた人に感謝することができる	2-2 「ありがとう」ということができる	2-3 感謝の気持ちを持つことができる	2-4 人を信じることができる	2-5 頼りにされることのできる	2-6 信頼感を持つことができる	2-7 時間を守ることができる	2-8 時間管理能力をもっている	2-9	2-10
(省略)											
10	地域理解の能力	10-1 地域文化を知ることができる	10-2 地域資源をみつめることができる	10-3	10-4	10-5	10-6	10-7	10-8	10-9	10-10

「CUDBAS」の進め方

注：森（1991）を参考に齊藤（2007）作成資料より





できなかったことではなく、できたこと、努力したことによりフォーカスするふりかえりが、次の活動への活力になる
(県立青少年センター事業「イベントボランティアセミナー」より)

このチャートにおける10項目は、①他者受容能力、②感謝表明能力／信頼関係構築能力／時間管理能力、③人間性構築能力、④自己形成能力、⑤コミュニケーション能力、⑥判断能力、⑦他者関係構築能力、⑧リーダーシップ能力、⑨自己環境拡大能力、⑩地域理解能力と分類されています。ボランティアに必要な「モチベーション」という言葉に、これほどの要素が含まれていることに気づかされます。



「ボランティア評価
の国際的到達点とク
ドバス手法を用いた
評価方法の効果性」
齊藤 ゆか (2007)

CUDBAS手法の評価基準は、5は「優れて知っている、もしくは優れてできる」、3は「一人前に知っている、もしくはできる」、1は「まったく知らない、もしくはできない」にあたり、4は5と3の中間、2は3と1の中間ということになります。

本来、能力開発のために強みと弱みを可視化することを目的とした手法です。数値による自己評価を行う前提で行われる仕組みであるため、主体的に継続的に活動している：参画のはしごの高い階層にいる若者に向いている方法だと考えられます。

詳細は左リンク先からご確認ください。ボランティアを経た学生たちの自己評価の平均値も紹介されており、より興味深い内容となっています。ループリック評価の先にさらに教育的な要素を加味したいとき、このCUDBAS手法が参考になりました。若者自身が自身の心の動きを肯定的に評価できる仕組みとして、一読をお勧めします。

(事務局職員 長南 悠太)

※ CUDBASについては、詳しくは「[CUDBASイントロダクションテキスト](#)」職業教育開発協会編、2018をご覧ください。
また、「[職業教育開発協会](#)」ウェブサイト内に解説があります。

<参考文献>

- 河村 茂雄 (2000)『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社
公益財団法人さわか福社財団編・「学生の地域活動研究会」協力・監修 (2021)
『ボランティア活動報告書の手引き』公益財団法人さわか福社財団
芹澤 和彦 「ループリックとは？活用の意義や作成手順、探究学習やグループワークでの活用例を解説」
CASIO「ICT教育・GIGAスクール構想関連コラム」<https://classpad.net/jp/school/column/> (2025.3.20 アクセス)
リクルート進学総研「探究活動におけるループリック 小瀬高校 令和5年度版」
https://souken.shingakunet.com/publication/career_g/2024/01/2024_cg449_dl1.pdf (2025.3.20 アクセス)
齊藤 ゆか (2007)『ボランティア評価の国際的到達点とクドバス手法を用いた評価方法の効果性』
日本福祉教育・ボランティア学習学会年報
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaassj/12/0/12_KJ00005291155/_pdf/-char/ja (2025.3.20 アクセス)
齊藤 ゆか (2022)『＜研究論文＞ボランティア評価学序説—ボランティア活動成果を確かなものに—』神奈川大学人間科学部
齊藤 ゆか・寺嶋 正尚・中島 さえ (2024)「ソーシャル活動につながるインセンティブの検討」
神奈川大学学術情報リポジトリ <https://kanagawa-u.repo.nii.ac.jp/records/2000392> (2025.3.20 アクセス)
森 和夫 (2019)
「人材の見える化が可能にする能力開発CUDBAS手法による能力マップ作成で、効率的な人材育成を実現する」企業と人材
<http://ginouken.com/201907/KigyotoJinzai.pdf> (2025.3.20 アクセス)

これまでみてきた、若者の居場所づくりやまちづくり、そして支援者の企画づくりや仕掛けづくりのヒント。読者のみなさまのご参考になっていれば嬉しいですが、きっとまだまだ残っていますよね、聞きたいこと。地域で若者の場づくりに取り組む編集委員の3名が、それぞれの視点でさらに3つの質問に答えます。



回答者

公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター 職員

社会福祉法人地域サポート虹 職員
(横浜市栄区青少年の地域活動拠点
運営受託団体)
フレンズ☆SAKAE 代表

小田原市教育委員会 教育委員
神奈川大学 非常勤職員
(社会教育課程地域コーディネーター)

南 太貴 委員
Daiki Minami

2016年に京都のユースセンター（京都市ユースサービス協会）に就職し、ユースワークに出会う。第3の居場所で青少年と関わりながら、演劇の手法を使った就労支援、知的障害の若者のアトリエ活動、中高生の居場所カフェ事業、社会的貧困家庭の学習支援などに携わる。学生の頃から10年以上ファシリテーションの現場に身を置き、大学のキャリア教育にも従事した経験を持つ。

2020年より多様な青少年支援を実践するよこはまユースに転職。

次世代の人材育成として、大学生の取材ボランティアコーディネーターや性教育を青少年育成者が学ぶワークショップを企画するなど、地域の青少年育成に携わる団体や若者の社会活動の支援を行う。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE01・02を担当。

岩堀 まゆみ 委員
Mayumi Iwahori

1999年より子育て支援に関わり、横浜市の親と子の集いの広場事業、乳幼児一時預かり事業等に携わる。

2011年に青少年の第3の居場所として栄区に開設された青少年の地域活動拠点、フレンズ☆SAKAEに開設時から勤務。現在はフレンズ☆SAKAEに加え、こども家庭支援センターにじでの勤務を通じ、幅広い年代の子ども・若者の支援に従事する。

2012年には桂山プレイパークの会を立ち上げ、青少年の遊び場でもあるプレイパークを栄区内で年7回程度開催している。

現在、横浜市立小山台小学校学校・地域コーディネーター、小山台中学校学校運営協議会委員を務め、学校と地域を繋ぐ活動にも積極的に取り組む。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE03を担当。

益田 麻衣子 委員
Maiko Masuda

2007年より小田原市PTA連絡協議会役員や小学校PTA会長を務め、2012年に市P連会長に就任。2014年に神奈川県PTA協議会副会長を務める。また、こんにちは赤ちゃん訪問員、社会教育委員、図書館協議会委員、同副委員長、市民活動推進委員会委員を務め、2018年には「子どもの育つ環境を豊かに、親のつながりを大切に、みんなで子育てを楽しみたい。」という理念のもと、NPO法人こころみを設立、理事長として活発な活動を展開し、現在に至る。

その後小田原市において教育委員会をはじめ、総合戦略有識者会議、青少年問題協議会、総合計画審議会、青少年未来会議の委員を務め、行政の子ども・若者支援に多角的に関わる傍ら、2021年より神奈川大学社会教育課程地域コーディネーターとして後進の育成にあたる。

本稿では参加・参画のアラカルトのうち、CASE04・05を担当。

Question_01

「関わり方」の加減

いわゆるコーディネーター的な支援者や地域の大人が意見を言い過ぎることで、若者の活動の選択肢を狭めたり、規定してしまったりしないよう気をつけたいと思っています。とはいえ任せきりもよくないように感じていて…。

若者が主体的に考えて地域に参画できるように、関わり方の加減についてどのように心がけていますか？

My Answer

地域との調整を密に

益田 委員

コーディネート役としては、活動の前に地域との関係を耕しておくことが大切です。例えば、大学の社会教育課程では、より学生を近くで支援する「地域コーディネーター」が、学生の活動に協力いただく地域の方に対し事前にカリキュラムを説明するなどの調整を図っています。

地域側は継続的に学生が地域に入って活動することを期待しますが、実際の「学生」という存在はメンバーの新陳代謝があるので興味の対象は移ろいますし、またそれぞれ多忙な生活を送っています。地域の課題解決という目的にまっすぐに向かう大人に対し、試行錯誤して失敗しながら成長を積むのが若者。失敗にも教育的な価値があることをお伝えしながら、地域のそれぞれの方にご理解をいただいています。

学生との関わり方については、できるだけやりたいこととの齟齬が生まれないよう、学生が考えていることに敢えて口を出さないようにしています。ただ、チャレンジしやすい環境を整えるため、メールのチェックや電話の挨拶文の方法などは指導することもありますね。こういったことも、地域コーディネーターの仕事です。

人間同士として知り合う機会を

南 委員

コミュニケーションについて考える上で、「若者」と一括りで考えず、同じような活動に見えても一人ひとりやりたいことは違うということを理解しておきたいところです。

地域の立場に立って考えてみましょう。例えば、若者と関わりたいという地域は、実は普段関わっていないからこそ、ということが多いので、若者の普段の生活、興味、こういったことを知らないことがあります。一方で、若者がみた地域も同様にわからない存在です。お互いにわからないということが、お互いに利用されているような不信感が生じやすい環境を作ってしまうんですね。コーディネーターとしては、それが解消されないと主体的なものは生まれない、という意味で、大人／若者というより、人間同士として知り合ってもらうことを大事にしています。

地域の方々に若者個人のやりたいことを理解していただきながら様々な活動に伴走するわけですが、例えば同じことばでも、若者は大人と違う想像をしていることがあります。そんなことも含めていろいろと気づいてもらえるようなコーディネーターの関わりが、若者にとってはおもしろいかもかもしれません。

声なきメッセージを逃さない

岩堀 委員

大人の立場では成長してくれたらいいと思うものですが、居場所に暮らすように集まってくる子ども、若者たちは成長したいと思っているわけでも、支援を受けたいと思っているわけでもありません。放っておいてほしい、とさえ思っています。「死にたいと思ったことがない人なんていないわけがない」、そんな会話がある中で、生きようとする、大人になることに前向きになれるように、何かに取り組むきっかけを作る、そういうことを続けてきました。

一人ひとりをみてそれぞれの持つ興味、置かれている状況を丁寧に拾っていった、それぞれのタイミングを外さないように毎日毎日投げかけていく。居場所の性格によっては、そんな関わり方もあります。



「目標」の持ち方

居場所にも、安心できる居場所やユースセンターなど様々な個性がある中で、施策として行政が運営する居場所には、若者の成長や成果、目指す姿といったものが求められる場面もあります。

職員としては人前で話せるようになってほしい、いろいろな企画にチャレンジしてほしいという思いはありつつ、教育の場ではないので「安心できる」ということにとどめ、そもそも成長モデルを作らない方がいいのか…施設によっても分かれている「目標」の持ち方について、ご意見をいただきたいです。

My Answer

目標は日常の「想像」と「失敗」

岩堀 委員

施設としてひとつだけ決めたことは、排除しないということ。違法行為は認めませんが、どんな利用者に対しても相手のこと、人のこと、世の中のことを考える機会をつくり、社会に出たとき困らないようにしていきたいと考えています。

具体的に常に伝えていることは、みんなが安心して居心地よく過ごせるように考えようよ、ということです。よくある場面で言うと、静かに勉強したい中学生、友だちとわいわい遊びたい小学生、両者ともに考えながら折り合いをつけていく。そのやり取りの中で小学生は中学生になるとテストというものがあると知ったり、中学生にはコーディネーターから、あなたもついこの間まであんな感じだったじゃない、と声をかけたり、お互いの状況を想像できるようにコミュニケーションしていきます。

居場所で過ごす時間は多様な人で成り立つ世の中に出ていく前の練習と捉え、コーディネーターが練習だから失敗してもいいんだよ、いろんなことをやっごらん、というスタンスでいることが結果として人間的な成長になる、と考えています。

その日、その場所の若者から

南 委員

目標には、個々の人間的な成長の軸と、教育的に設計されたカリキュラム的な軸があるように思います。自分自身は、その2軸を行ったり来たりして関われるようにしたいです。

「居場所」は実は難しい言葉で、実際には多種多様です。寺子屋や子ども食堂など、特定の層を対象にしていたり、特定の企画を行ったりしている居場所であれば目標を設定しやすいですが、全ての人に開かれている居場所は若者の成長モデルのようなものを設定しにくいと思います。

ただ、施設はどこでどのようにオープンするかで利用者が変わります。学校の近くで自習場所として利用される居場所ならパーテーションを、繁華街にある居場所にはビリヤードを、という風に、利用者がどのように過ごしたいのかを見極めながら施設のつくりも考えていってはどうでしょうか。支援者側が成長モデルに思いを反映し過ぎると、そこは若者の居場所なのか…？になりかねないので、その場所の、その利用者に相応しい過ごしやすさや安心感を考えていく。その先に持つべき目標や居場所観が生まれてくると思いますよ。

職員が目指すものは持とう

益田 委員

気持ちがある人が立ち上げて運営する、NPO等の取組みとは違う難しさですね。人事の関係で、全く違う仕事をしていた人が担当することになった、予算がついているから進めなければならぬ…そこは行政ならではの思いです。他にも行政の現場からは、予定されているプログラムをやらないと、でも人が集まらなくて、なんて聞かれますが、プログラム自体の実施判断があってもいいのではないかと感じることもあります。

居場所については、若者にその目標を求めるかどうかは別にして、どんな空間にしたいのか行政職員がコンセプトをはっきり持つ方が進めやすいのかもしれませんが。運営するスタッフ全体にそのコンセンサスがあれば、見合った活動ができていくように思います。

岩堀委員の体験談

最初はフレンズ☆SAKAEも、利用者が集まらないこともありました。でも、開け続けていればやってくる子ども、若者が出てきます。自分の居場所にしたい、自分の居場所だと思ふ、そういう人が出てきたとき、その人たちが自身の居心地よくしたい思いが膨らんでいって一緒に場を作ることにつながっていきます。

子どもや若者はそういうすばらしい力を持っているので、信じて待ちましょう。

Question_03

「連絡方法」のツール

高校生から30代くらいまでの若者ボランティアと活動しています。ある程度の期間にわたって何かを作る、達成するまでの過程で、少しずつ人数が減ってしまうことが課題です。

活動を続けやすいように連絡方法を工夫したいと思いますが、現状ではLINEで個々にやりとりする事業もあれば、LINEグループでやりとりする事業もあります。若者にとってはグループでやりとりする方がつながっている実感を持ちやすいものか、それとも若者同士の人間関係にも配慮して個別にやりとりする方がよいものか…など、若者との連絡の取り方に迷っています。

My Answer

LINE vs 公私の区別

益田 委員

大学生とのやりとりでは便宜上LINEグループを作って進めています。ただ、社会教育の世界は元々仕事と私生活の区別がなくなりやすいもので、他のコーディネーターからは学生から夜中や休みに関係なく連絡が来る、という悩みを聞くこともあります。

密なコミュニケーションは心がけたいものの、SNSではタイムリーに反応しなければ信頼関係が築けないということもあり、難しいところです。Instagramに関しては私生活についても知られるので、仕事として若者と関わっている方々の中にはSNSをどこまで活用するか悩んでいらっしゃる方もいるようです。

グループ向けアプリを使っています

岩堀 委員

ティーンズクリエイションでは「BAND」というSNSを利用しています。個々のやりとりが中心のLINEと比較して、グループでのコミュニケーションの機能が充実しているのが特徴ですね。動画はもちろん、楽譜も共有できるので、それぞれが劇中の歌を自宅で練習するのに役立っています。使いたい機能によって、アプリも変わるかもしれませんね。

利用者からみて情報が埋もれやすいLINEと、区別できることもよいです。繋がりという意味では、結束感のある名前ですね。

「いいね」で反応が返ってくる！

南 委員

学生ボランティアとは、「Discord」というSNSでやりとりしています。「Slack」みたいな感じですが、Discordはメールアドレスだけで参加できたと思います。グループを企画や取材ごとに作り、「zoom」のようなイメージでオンラインミーティングをすることもあります。テキストメッセージも長くなることが多いです。通知されない、といったトラブルも時々ありますが、比較的使いやすいと感じています。

新しいアプリは、コーディネーター側が慣れていないと学生も使ってくれません。先にしっかり準備しておくことと、事前に「必ずリアクションを返してください」と伝えることが大切です。メールとは違い、LINEのスタンプやいいねのように、簡単に返せるというところで彼らにとってリアクションのハードルが下がっていると思います。



事務局より

人数が減ってしまうというところに関しては、ふるふるでは中間報告会、ティーンズクリエイションではプレ公演と、事業中盤で地域の方々が観に来る機会があって、それが活動の刺激になっていました。

例えば大人から見ると100日は短いですが、若者にとっての100日は長いですから、1年間の事業であれば、3か月単位でそういった機会を作っていく手もありますね。

あとがきに代えて

家庭、学校に次ぐ子ども・若者の第3の居場所、地域社会。

「こどもまんなか」時代の神奈川県で、若者の社会参加・参画という視点から好事例を収集した今回の企画は、委員、事務局にとっても多くの学びがある活動でした。みなさんはどのような感想を持たれたでしょうか。

地域を歩くと、まちには若者の日常生活を支援するユースワーカー、地域活動のコーディネーター、あるいは異なる主体の交流を促すファシリテーターとして活動する、多くの人々の姿があります。そしてともに生活し、ともに活動に取り組む多くの若者の姿もあります。こうした方々の情熱を、紙面を通じ感じていただけていたら、そして今後、それぞれの活動の一助としていただけたら、これほど嬉しいことはありません。

今回、取り上げられなかった事例も含め、多くの方々に協力をいただき発行することができました。ご協力いただいたみなさまに、委員一同心より感謝申し上げます。

そして最後に、まだ何者でもなく、可能性に満ちた当事者である若者たちへ。

神奈川県にゆかりのある白樺派の作家、有島武郎が1918年に発表した小説、「小さき者へ」の一節をエールとしてお送りし、結びとさせていただきます。

小さき者よ。不幸なそして同時に幸福なお前たちの父と母との
祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。そして暗い。
然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。
行け。勇んで。小さき者よ。

わかものまんなか社会へ
— 地域参画の事例集 —

発 行

神奈川県青少年指導者養成協議会

企画・編集

公益財団法人よこはまユース
横浜市青少年育成センター 職員 南 太貴

小田原市教育委員会 教育委員
神奈川大学非常勤職員（社会教育課程・地域コーディネーター） 益田 麻衣子

横浜市栄区青少年の地域活動拠点 フレンズ☆SAKAE 代表
一般社団法人地域サポート虹 職員 岩堀 まゆみ

寄稿・監修

神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか

取 材 協 力

COCORUかまくら／鎌倉青少年会館 鎌倉市こどもみらい部青少年課
知る、伝える。ボランティア／横浜市青少年育成センター OB・OG
Sakae Wakamono Creation／フレンズ☆SAKAE 坂本 祭
一般社団法人 FROM PROJECT 竹内 薫
ふろぶろKananishi 成川 愛花
神奈川県西地域県政総合センター 企画調整課
神奈川大学社会教育課程 かながわユースフォーラム実行委員会

神奈川県立青少年センターユースサポーター
(神奈川県子ども会連絡協議会ユース・リーダーズクラブ)

高橋祐輝 土屋虹平 船松千夏 溝井美花

神奈川社会教育士会
公益財団法人 さわやか福祉財団

事 務 局

神奈川県立青少年センター 栗田 強太郎
指導者育成課 狩野 陽士 長南 悠太 青木 祐樹
山西 康介 坂井 宏彰 壁谷 亜美

住 所 〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1
U R L <https://www.pref.kanagawa.jp/docs/ch3/ikusei/top.html>

発行年月日 令和7年3月31日

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

